



コロナ禍の中で

コロナウイルス対応に追われる中、この3月まで東洋大学の学長を務めておられた竹村牧男氏から激励のメールを頂きました。平素より親しくお付き合い頂き、氏とは同い年ですが、かねて私が当代第一等の仏教学者と尊敬する仏教学のオールラウンドプレイヤーです。

そのメールに、こうありました。「最近、空海さんに関心を集めていますが、空海さんも、いろいろ疫病退治をなされたようです。ほんの少し、伝承を集めてみました」と。そして、弘法大師の疫病退治について、昭和9年に「六大新報社」から出版された長谷寶秀という方が書かれた『弘法大師行状絵詞伝』という、大師の生涯のハイライトを24の場面にわたって描いた絵巻に関する解説文の中の、こんな一節を紹介して下さいました。

「弘仁9年の春、疫病、天下に流行して、死屍、野外に満つる有様でありました。嵯峨天皇、深く宸襟を悩まされ、疫災い消除の為に、自ら宸翰を染めて般若心経一巻を書写し給ひ、大師に勅して講讃供養せしめられました。大師、勅を受けて此の経を講じ給ふに、「大師の御講讃未だ全く終はらざる間に、効験速やかに顕れ、疫災みな止み、死人も多く蘇生しました。是れ全く大師、鷲峯親聞の深義を述べ給ふに因ると申し伝へます」。

やや文語調の難しい表現ですが、これを中学生や高校生にも解る表現に言い換えますと、こんな言い方になるでしょうか。

「弘仁9年（818年）の春に、疫病が世の中に大流行して、死骸があちこちに散らばる惨憺たる有様でした。嵯峨天皇は、大いに御心を悩まされて、疫病の災禍を消滅除去するために、ご自身筆を持たれて『般若心経』一巻を写経なさり、弘法大師にお命じになって、これを詠じ、讀え、供養してくれるようにとお頼みになりました。弘法大師が、この勅命を受けて、このお経を讀誦して下さいますと、「弘法大師のご講讃がまだ全て終わらない裡から、大師のご祈祷の靈験がたちまち現れて、疫病の災禍はことごとく消え去り、死者も多くが息を吹き返したということです。これは、お釈迦様があの靈鷲山の頂きで弟子達の前で説法なさった『法華経』や『無量寿経』という尊いお経の真髓を、弘法大師ご自身も正にその場に列席されていたかのように、親しくお聞き取りになって、私達にあのお釈迦様の御教えの深い奥義をお説き下さったお蔭によるものと述べ伝えられています」。

仏教に深く帰依し、自らが信仰の対象となった宗教家であり、仏教史・仏教哲学を総合的に体系化した思想家であり、踊るような文体で幾多の詩文や随想を著した文芸家であり、唐の皇帝からも日本の天皇からも揮毫を求められた能書家であり、田畑を潤す灌漑工事を指揮した事業家であり、我が国初の私立学校を創設した教育家であり、都の大寺院を治め、深山幽谷に壇上伽藍といわれる修養道場を開いたオーガナイザーにしてプロデューサーであ

り、ダ・ヴィンチやプラトン以上の万能の天才であった弘法大師空海なればこそ、疫病退治は、本当に果たし得た事実だったのかも知れません。あるいは、弘仁9年という平安時代も初めの頃のことですから、祈祷以外、他に頼る術もなく、あの万能のお大師様ならきっと皆の苦悶・苦衷を救って下さったに違いない、そうした人々の切実な願いが投影された逸話だったのかも知れません。

正に毎日祈りたくなるような、そんな思いに駆られる今日のコロナ禍の中ですが、しかし私達の時代には祈祷だけでなく、幸いなことは、日々進歩する医療科学があることです。コロナウイルスを克服する、しかも安全なワクチンは必ず開発され、その恩恵に浴する日もそう遠くないものと信じます。と同時に、疫学的知見が往時とは比べられないほど発達したのですから、ロックダウンという言葉ばかりが飛び交って、全ての社会活動・社会心理がそれに制約されざるを得なかった3月下旬から約半年ばかりが経過して、このウイルスの実体についてももう少し冷静な認識と見解が広く世の中に伝えられることを望まざるはおれません。

※長谷氏の解説は、『古今著聞集』の記述を典拠とするものと思われる。同書は、『今昔物語集』、『宇治拾遺物語』と並ぶ我が国三大説話集の一つ。

[>前のページへ戻る](#)